

白川静のことば

《26》



金子都美絵・画

遊ぶものは神である。神のみが、遊ぶことができた。遊は絶対の自由と、ゆたかな創造の世界である。それは神の世界に外ならない。この神の世界にかかわるとき、人もともに遊ぶことができた。神とともにというよりも、神によりてというべきかも知れない。祝祭においてのみ許される荘嚴の虚偽と、秩序をこえた狂気とは、神に近づき、神とともにあることの証しであり、またその限られた場における祭祀者の特権である。

遊とは動くことである。常には動かざるものが動くときに、はじめて遊は意味的な行為となる。動かざるものは神である。神隠るというように、神は常には隠れたるものである。

〈中略〉

遊とは、この隠れたる神の出遊というのが原義である。それは彷徨する神を意味した。

その字形は、旗をもつ人の形にしるされているが、旗は氏族の標識を示す。〈中略〉それは氏族の霊の宿るものであり、氏族の表象に外ならない。旗を掲げるものは、その氏族神とともにあるものである。氏族の者たちが遠く出行する際に、旗を掲げて行動するのは、その氏族神とともに行動することであり、あるいは氏族神そのものの出行とも考えられる。

それが遊である。遊とは神の出行である。

